

## 高橋財政と国債消化力 ——国債引受シンジケート銀行からの考察——

佐藤政則

### 〈はじめに〉

高橋財政における高橋是清は、複雑である。戦時に促迫された管理通貨制下の財政金融運営に踏み出しているのだが、アクセルとブレーキが併存しているからである。

例えば、金本位制を放棄し日銀引受国債発行という歴史的な行動をとりながら、金準備に強くこだわり、インフレ発生に戦々恐々とする。軍事予算を大幅に認めながら、その抑制のために「国債漸減方針」を打ち出す。単年度における歳出歳入均衡原則の放棄という劇的な措置をとりながら、複数（3年程度か）年度における均衡（「健全財政」）を強く意識する。歳出面においては非常時・戦時財政をとりながら、歳入面では増税の忌避、国債消化という平時を崩さない。外国為替管理法を定め統制を著しく強化しながら、投機思惑を除く、自由な経済活動を「放任」する。

いずれの前者も「戦時其の他非常時に於ては已むを得ざる所として忍ばねばならぬ」（高橋是清）のであり、それらは不可逆的な事柄ではなく、高橋にとっては緊急避難的措置（「一時的便法」）だったのかもしれない。なお、上記前者を意識すれば準戦時となるが、後者に着目すれば、例えば「『軍国主義への最後の障壁』」（スメサースト）となる。

以上を念頭に置いて、以下では、まず高橋が蔵相に就任する1931年末の危機的状況を再現する。これは、なぜ公募ではなく日銀引受発行が採られたのかに関する一応の回答でもある。次に高橋財政を支えた売りオペ市場の質を問い、国債消化力の実態に迫る。そして最後に、高橋日銀総裁の経済論から高橋蔵相のそれを観察し、2・26事件で破壊されたものが何であったのかを指摘する。